

「分からない」を大切にする教育

夏季休業中、学校内で行われる研修会に私を招いてくださった学校が10校になった。もちろん、休業中なので、実際に授業を参観することはない。では、どういう研修会なのかだが、それは、学校によって異なる。9月以降に行う授業の学習材研究を学年会・学年部会で行っているところに私も加わるという場合もあれば、子どものようにグループを組んでいる先生方に対して私が授業のようなことを行うという場合もあった。その学校の1学期の授業映像をもとに学び合うということもあったし、その際、その授業に対して記した私のコメントを読み合って考え合うということもあった。

そんな中、ある市において、中学校と、その中学校に子どもが進学する小学校との合同研修会に参加することがあった。その研修会で、浮き彫りになったのは、子どもの「分からなさ」だった。「令和の日本型学校教育」のサブテーマが「全ての子供の学びの実現」となっていることから「すべての子ども」と考えたとき、真っ先に浮かぶのは「分からないままになっている子ども」だということから、「分からなさ」が焦点化されたのだと思った。

私は、『続「対話的学び」をつくる』（ぎょうせい）の第一章の第1節、つまりこの本の真っ先に位置づけたことだが、その標題を「学びは分からなさで間違いから」としている。そんな私にとって、このように「分からなさ」を話題にした研修会をしていただいたことはうれしいことだった。

研修会を終えて帰宅するため新幹線に揺られていた私の脳裏に浮かび上がったのは、それらの学校の先生方に、お礼の気持ちと合わせて、もう少し丁寧に、私の考える「子どもにとっての分からなさ」について、メッセージを送ろうということだった。

以下、そのようにして綴ったメッセージを、若干手を入れた形で掲げることとする。

1 「分からない」が出せる子どもたちにする

H中学校のグランドデザインに「誰一人として置き去りにしない授業」と書かれています。そのことは「令和の日本型学校教育」のサブテーマの「全ての子供の可能性の実現」と相通じることです。ですから、先生方は、「誰一人置き去りにしない」ということは「分からない」子どものことをそのままにしないことだと考えておられるのだと思いました。

けれど、何人もいる中でどの子どもがどこでどういう「分からなさ」を抱えているのか、そしてそれは、学びとしてどういう可能性を秘めているのか、それを、授業の場で瞬間瞬間にとらえるということはかなり難しいことです。どの先生もそのことを感じておられるのだと思いました。

けれども、「難しい」と言っているだけでは、「誰一人の置き去りにしない」という文言は、単なるスローガンとなってしまいます。

そのとき浮き上がるのは、「分からなさ」を抱えている子どもはその「分からなさ」を言うことができないでいる、だから、教師である私たちにはその「分からなさが見えない」という現実です。

講演でお話したことですが、世の中には、「すぐ分かることは優秀である」、それは逆に言えば、「すぐ分からないことは劣っている」ということですが、そういう間違った価値観が蔓延しています。子どもたちは、そういう価値観の中で生きているのです。だから、「分からない」と言えないのです。それを言うことは、「劣っている」という自分をさらけ出すことになるからです。

でも、その「分からなさ」が姿を現さない限り、それぞれの子どもの学びを深めることはできません。そして、その「分からなさ」がそのままになり、それが日々降り積もるように蓄積されていけば、それが子どもたちの学びに対する意識にどういう影響を及ぼすかは、言葉にしなくても分かることです。

この状態を少しでも改善しなければ……、教師ならきっとそう思うでしょう。

それは、少しでも多くの子どもが、その「分からなさ」を言えるようになるということでしょう。子どもが「分からないこと」を出してくれれば、私たち教師もそれに対応することができるからです。

でも、「分からないときは『分かりません』と言っていいんだよ」と『『分からない』と言えることは素晴らしいことです』と百回言っても、子どもはなかなか出してはくれません。それほど、世間の価値観が子どもたちの気持ちを縛っているのです。

つまり、その子どもたちの現実、世間の価値観を超えて、「言ってみようかな」「尋ねてみようかな」と思うようにしなければいけないということを表しているのです。

子どもたちに世間の価値観を超えさせるもの、それは何でしょうか。

それは、「本当にそうだ」と子どもたちが感じる経験であり、そこから生まれる「納得」でしかありません。

「分からないこと」を出したことで、こんなによいことがあった……という経験が、毎日毎日、降り積もれば、「本当に先生の言うとおりに、『分からなさ』から出発することで学べる」と納得してくれます。私たち人間の「行動」は、「納得」とか「信じてみよう」という思いが生まれたとき、最初は半信半疑だったとしても、次第にそうに違いないと思うようになっていくのではないのでしょうか。

そこで、そういう「分からないこと」を出してみるという経験はどうしたら生み出せるかということになります。

もう先生方は気づかれたと思いますが、頑なに世間の価値観から抜け出そうとしない子どもたちを「信じてみよう」という気持ちにさせてくれる人は、子どもたちの側から言えば「先生」でしかないのではないのでしょうか。

つまり、教師である私たちこそが、その世間の価値観という縛りから抜け出し、「分からないことに粘り強く取り組むことの値打ち・素晴らしさ」を実感している存在にならなければ、子どもたちを「信じてみよう」という気持ちにはできないのです。

今年のお正月、私は、小学校3年生で担任した子どもと再会しました。会いたいという連絡があり

指定された居酒屋に行ったら7人来てくれていました。35年ぶり、彼らはもう40代になっていました。

そのうちの1人・Yさんが、その日から1週間後にメールをくれました。そのメールに次のようなことが書かれていました。

—— 当時の私はとても引込み思案でしたが、国語の授業のとき、先生がどんな意見も否定せず「そんな考えもあるね!」と広げてくださったおかげで、初めて手を挙げて自分の言葉を話せるようになりました。あの安心感が、今の私の自信の根っこになっています。——

Yさんは、おとなしい子どもでした。でも、いつも、何かじっと考えている、そんな感じがしていました。その頃の私は、たとえ「間違い」であっても、「方向違い」であっても、真正面から、その子の考えたこととして大切に聴こうとしていました。もちろん、それは間違いをそのままにするということではありません。間違いであれば、どう考えているのかとその子に「寄り添って」いくことで、その子どもの考えを理解し、そこから学びの扉を開けることができると思っていたのです。

私が著書（ぎょうせい『続「対話的学び」をつくる』）に書いている「〈分からなさ〉や〈間違い〉の傍らに〈学びのツボ〉がある」は、こういう私自身の子どもたちとの体験から生まれたものです。子どもの「分からなさ」や「間違い」を大切に受け止めるうちに、そういう「分からなさ」や「間違い」のこんなにも近いところに、その学びの最も大切なことが存在していたのかと感じたからです。

私はYさんに「そんな考えもあるね!」という言葉を送りましたが、私は、そのような言葉をYさんだけでなく多くの子どもたちに返していたと思います。それが子どもの心にどう影響していたか、それをYさんは「安心感」と言い方で伝えてくれました。

「分からないことを出してみよう」「尋ねてみよう」という思いは、その「安心感」から生まれるのであり、その「安心感」を子どもに感じさせることができるのは「教師」なのだという厳然たる事実を、Yさんにはそんな大それた思いはないのですが、私たち教師に示してくれたのでした。

2 「分からない」を大切にしよう学級にすること

子どもたちが世間の価値観を超えて「分からない」と言えるようになるために、もう一つ大切なことがあります。それは、学級の雰囲気です。つまり、子どもたちの関係性の中に、「分からないでいること」「間違ってしまったこと」を下に見るような意識がある、または、仲間がどういう状況になっても無関心、つまり、それは「寄り添えない」という状況ですが、それがあると、子どもたちの口は堅く閉ざされてしまいます。

子どもたちのなかに生まれる「分からなさ」は、一人ひとりみな異なります。それを教師一人ですらえ切ることなどできるはずがありません。

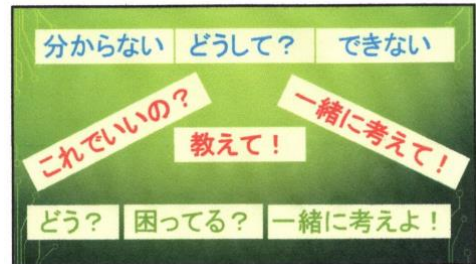
もし、学級に「分からない」と言うことのできる、つまり相談したり、尋ねたりすることのできる、そういう「場」があり、その場に「寄り添い合い感」が生まれていたら、教師ひとりではとらえきれない「分からなさ」も姿を現すことになるのではないのでしょうか。もちろん、それは「分からなさ」だけではなく、生まれているのだけれど頭の中にしまわれたままになっている「素晴らしい気づき」、私はそれを「学びのかけら」と呼んでいます、それも姿を現すことになるでしょう。

そういうものが出てこなければ、子どもたちの「学び」は深くならないのです。「全ての子供の可能性」など実現できないのです。どの子どもも安心して学べる教室にはならないのです。

教師の「発問」による「一斉指導型」の授業では、どんなに優れた教師であってもそれを引き出すことはできないでしょう。

子どもたちに「寄り添い合い感」をもたらす「場」、それはどういう「場」でしょうか。

私は、講演の最後に、右のような画面をスクリーンに映し出しました。真ん中の段の「これでいいの?」「教えて!」「一緒に考えて!」の3つの言葉は、「分からない」状態の子どもが友だちにかける言葉です。そして、一番下の段に掲げた3つの言葉「どう?」「困ってる?」「一緒に考えよ!」は、「分からなさ」を抱えている子どもの周りにいる子どもたちが「分からなさ」を抱えている仲間にかける言葉です。



もし、こういう言葉が仲間同士で出すことのできる学級だったら、「分からなさ」から学びを生み出すことのできる学級になっていくでしょう。そういう事実が毎日のように降り積もったら、「分からなさは学びの出発点であり、そこから出発して粘り強く考えていくことにこそ価値がある」という学び観を持つようになるでしょう。それこそが「探究心」です。

そういう子どもの「つながり」はどこから生まれてくるのでしょうか。先生一人が何人もの子どもに発問して教える「一斉指導型」では生まれないことは前述しましたが、だからと言って、子どもにそうするようにと百回説いても生み出すことはできないでしょう。でも、小集団の中でなら、子どもの考えを大切にする授業をすれば、少しずつ少しずつその小集団の中で、前記のような言葉がけが生まれてくるでしょう。目の前に、仲間がいて、一つのチームとして取り組むという状態になれば、子どもたちは大なり小なりかわり合いを始めるにちがいないからです。それが、グループの学びであり、小学校の低学年ならペア学びなのです。

大切なことは、グループにしてグループの一つの考えをつくらせるということではないのです。私の若い頃の班学習ではそういう考え方もありましたが、今、浮き上がってきているグループは、一人ひとりが「分からなさ」を抱えていても、「間違い」をしてしまうことがあっても、難しい問題が出て、一人ひとりがそれぞれに学びを深めていくことができるための学び合うグループなのです。

教師の「分からなさ」に対する対応が真っ先になされ、それとともに、子ども相互のつながりが生まれる、その二つが両輪となって、「分からない」「教えて!」「一緒に考えよ!」という子どもの学び方が生まれるのです。

3 「分からない」を大切に学校にすること

学校全体で「学び合う学び」に向けて取り組もうと、新しく舵を切る場合、避けて通れないことがあります。それは、先生方全員の共通理解を図ることの難しさです。

どんな場合でも、根底に置いていなければいけないのは、人の考えは一律ではないということです。

そして、社会は、さまざまな考えに基づいてできているという厳然たる事実です。

私は、子どもたちの授業において「3つの<い>を大切にしましょう」と先生方にお話しています。それは「分からない」「間違い」「考え方の違い」の3つです。「わからない」と「間違い」の大切さはここまで述べてきたことですが、「考え方の違い」もとても大切なことです。

考えてみれば、大人の関係においても、前述したように、人の考えは一樣ではありません。それなのに、「考え方の違い」が歓迎されないことが多いのではないのでしょうか。「考え方が一つ」になったほうがやりやすいからです。でも、「同一化」「同質化」したことによって閉鎖的になり、間違った方向に行きかけても正せなかった」という事例は枚挙にいとまがありません。無理な同一化、同質化はよいことではないのです。それなら、ということで、考え方がばらばらのままにしたらどうなるのでしょうか。そのようにして重大な危機に陥ったという事例は、「同一化」よりも目にしたり耳にしたりすることが多いのではないのでしょうか。

では、どうすればよいのでしょうか。大切なのは、異なり・違いに基づいて「思考する」、「冷静に引き比べる」ことです。自分の考えに固執しないで、一旦相手の考え方に立って考えてみたりして、どうすることがよりよいことなのかを「見つけ出そう」と心を使うことです。そして、今直面していることに対する「よりよい答え」を、協同で見つけ出そうとすることです。そうすると、最初から「こうだ」と決めるよりも、異なる考えと突き合わせた方が深まっていることが多いのです。異なるものに出会うことによって別角度から考えることができるからです。

私が「3つの<い>」の一つに「考え方のちがい」があると述べる意味はここにあります。子どもたちの学びは、異なる考えに触れることで豊かになるのです。だから、いろいろな考えを出せることも、いろいろな考えを聴こうとすることも、なくてはならない学び方なのです。

同じことが、教師の学校経営における共通理解の図り方にもあります。無理な「同一化」になってはならないし、「理解し合おうとせずバラバラになる」こともよいことではありません。こういうとき、子どもの学びにおける「3つの<い>」の一つである「考え方のちがいの尊重」がなんとしても必要なのです。

例えば、「グループによる対話的学び」の取り入れに対して、その「対話的学び」を受け入れられないと主張する教師がいたとします。そのときなんとしても必要なのが、その人のその考え方がどこから出てきているのかを知ろうとすることです。もしかすると、その先生には、学びを深めるどころか烏合の衆のようなグループになったのを目にした経験があるのかもしれません。

そういう経験を聞かせてもらうことはとても大切なことです。実は、「対話的な学び合う学び」において、もっとも陥ってはならないのがそれだからです。グループにするだけで学びは成立しないのです。その危険性に注意が払えない教師になってはなりません。安易なグループが持つ危険性をこのように語ってもらうことで、その学校の「対話的学び」がよりよいものになるのです。

もちろん、「対話的学び」がなぜ大切なのかを語る教師がいなければなりません。そこで語られることが「対話的学び」の重要な柱になると思うからですが、その柱に、先ほどの「烏合の衆」のようにしてはならないという警鐘がつながれば、どんなグループの学びをどのように育てていくかという議論ができるでしょう。そうなったとき、最初、「受け入れられない」と言った人の考えが大きな役割を果たしたことになります。そのような論議の末に始まる実践は、今後、その都度、参観し合って深まっていくことになります。それが共通理解です。

このようにして始まる「グループの対話的学び」なら、「分かなさの重要性」がしっかりと位置づけるのではないのでしょうか。そして、「烏合の衆」のようなしゃべり合いにはならず、一人ひとりの学びを大切にする意識が子どもたちの内に生まれていくことになります。

こうして、教師たちの間にも子どもたちの間にも前向きな意識が醸成され、それが実践に移されていくことになります。

4 「目指すもの」を生み出すために不可欠なこと、それは「持続」

教師の仕事に、「研修」はなくてはならないものです。「専門職」だからです。それは、法律で定められた「義務」でもありますが、教師自身の「権利」でもあります。「働き方改革」が進められる中、「研修」の時間を削ることはあってはならないことです。もしそういうことになったら、「権利」であることを主張しなければならないでしょう、削るべきはそこではないと。

その「研修」、この年度は何に取り組もうと考え、毎年、次々と新しいことにするのは、決してよいことではありません。そういう研修でその学校の教育が深まったということは、まずないでしょう。どんなことでもそうですが、「目指すもの」を創り出すまでには時間が必要なのです。つけ刃で行ったものがすぐはがれてなくなるのは当然のことです。そういうことをしているから、子どもの状況はよりよいものになっていかないのです。

「目指すもの」が生まれたら、時間をかけて取り組む覚悟を持つことです。「持続」させなければしっかりしたものにはならないのです。

ところが、公立学校において「持続」させることは簡単ではありません。人事異動があるからです。地域によって異なりますが、教員は比較的長く居ることができますが、校長は2,3年でかわることが多い現状があります。

8月4日～5日に開催した「授業づくり・学校づくりセミナー」において学校づくりの発表をしていただいたK小学校は、私がかかわって9年目になる学校です。その間、校長は4人目であり、立ち上げ時にいた教員は一人もいません。それでいて持続し、入学時から6年間その学び方で学んできた6年生の子どもたちの授業映像が多くの人に感銘をもたらしたのです。

それは「持続」してきたからこそ生まれた姿です。「持続」は、子どもたちのために大切なことです。学校の主役は子どもたちです。その子どもたちの学びのために、育ちのために、大切なことを持続させていく、それは、教師としての役割です。

ただ、その一方、よくない状態に陥っているとき、今取り組まなければいけない喫緊の状況が生まれているときは、新しい「持続」を創りださなければなりません。それは、自分一人だけのことではないからです。だから、「どこまでも続くその学校の未来に向かう流れの中の今の位置を認識し、これから先どうなっていくのかという未来を読み」、そのために、自分が、あるいは現在の学校が果たすべきことを熟慮して気づき、実践すること、それが大切なのではないのでしょうか。

新学期は、心新たに歩みを進めることのできるチャンスです。そんなときに、私のお話したことが少しでも役立てばうれしく思います。子どもたちとの日々がよりよいものになりますように。